

---

# DoubleArts Legend

マヨラー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Double Arts Legend

### 【コード】

N9852G

### 【作者名】

マヨラー

### 【あらすじ】

いつも貴方は、隣にいる。大切な人を護りたいと願う少年と少女の世界を救う旅を描いた心温まる冒険ファンタジー…。

**第1話：「真っ暗な広場で」（前書き）**

古味直志先生による本格ファンタジー漫画「ダブルアーツ」のファンフィクションです。

## 第1話：「真っ暗な広場で」

冷たい地下牢の中で一人の男がハア、とため息をついた。

ここはラインバーク犯罪者収容所。捕まっているのはアブロ＝リベリカ。

捕まってからどれくらいたったのかは、日の差さない地下牢の中ではわからない。

時間もわからないような退屈な牢屋の中で、彼のいらいらは日に日に増していた。

ある日彼は、何かの音で目を覚ました。

・・・いや、声だ。誰かが苦しそうに呻いている。

どうせ看守が悪い夢でも見ているのだろう。

そう思い、もう一度眠りにつこうと思ったその時、暗闇の中から声が聞こえた。

「おやおやアブロ。こんなところで何をしてるんだ？」

聞き覚えのある声だった。

「あなたは・・・!!」

その時パツと部屋の明かりが灯った。

・・・牢屋の鍵が開けられていた。

そして牢屋の外には、アブロがよく知る人物が立っていた。

「師匠!？」

「久しぶりだな。アブロ。」

牢屋の前に立っていたのはアプロの師。  
話を聞けば、キリとかいうガキの護衛をしているファラン＝デンゼ  
ルについて情報を仕入れに来たらしい。

『Double Arts Legend』

1：〜真つ暗な広場で〜

・・・そのころ。

「どうした、食べないのか？」

ファランが言った。

ここは「バレッタ」という街のとあるレストラン。  
キリとエルレインは食事に手をつけない。

《・・・だつてこれ「お子様ランチ」じゃん!!》

と、二人が思っている内にファランは自分のお子様ランチについて  
いる旗を、服の裏にしまいこんだ。

スイは気にせずバクバクと食べている。

「それで、話しておきたいことって何ですか？」

エルレインは話をそらした。

「今後の方針についてだ。」

キリとエルレインがファランに双戦舞の教えを受けるにあたって、  
「今後の方針は全てファランが決める」という決まりがあった。  
ファランが続きを話そうとしたその時、食事を終えたスイが突然立ち上がり、足早に店を出て行った。

「何なんだ？スイの奴、この頃様子がおかしくないか？」

ここ最近スイは、朝、宿で目覚めると既に何処かへ行ってしまっているし、昼飯時に帰ってきたかと思うと、食べ終えた後はすぐにまた何処かへ行ってしまふ。

そして次に帰ってくるのはキリ達が寝静まった深夜……。

スイは3人に秘密で”何か”をしているようだ。

ファランはスイのことは気にせず話を進めた。

「これからの旅の中で、お前らにいくつかの課題を出す。」

「課題？」

キリが言った。

「そうだ、双戦舞についての課題だ。」

ファランは話を続けた。

ファランが言うには、一つの街に着くたびに一つの課題を出す。その課題をクリアできれば、次の街へ出発するという方針らしい。

ファランが話し終わったところで、キリが一つ質問をした。

「なあフアラン・・・先生？一つ目の課題って何なんだ？」

キリが”わざとらしく”「先生」とつけた。

「キリさんフアランさんのこと、からかってますよね!？」

エルレインがツツコミを入れた。

フアランは続けた。

「・・・お前らはもう一つ目の課題はクリアしている。」

フアランの話を聞きながら、エルレインはキリの方を向いてびっくりにした。

キリの頭の上にたんこぶが5個重なっていた。

フアランの手から煙が出ている。

まったく見えなかったが、フアランが一瞬でキリの頭に5発ものパンチを入れたらしい。

恐らく「先生」と言われたことが気に食わなかったのだろう。

キリが頭に手を当てて呻いていたが、フアランは気にせず話し続ける。

「お前らにとっての二つ目の課題は、デオドラドでやったあれだ。

これからこの街で二つ目の課題をやってもらおう。」

「じゃあその二つ目の課題って何なんだ・・・先生？」

負けず嫌いのキリさんが、性懲りも無く言った。

エルレインがキリの方を見た時には、既にたんこぶが6個追加されていた。

「そう焦るな、レッスンは明日からだ。説明は明日にする。」

「……………」

負けず嫌いのキリも反抗するのはやめたようだ。

3人は勘定を済ませて、宿へ出発した。

暗くなってきた道を歩いていると、エルレインはあるものを発見した。

真っ暗な広場で、スイがトレーニングをしていた。

そういえば、スイがちよくちよくいなくなるようになったのは、スイがファランに負けたあの日からだった。

スイさんも意外とがんばる一面もあるんだな、とエルレインは思った。

スイの姿に、キリとファランはまだ気づいていない。

しかし、遠くを見据えているエルレインを見てキリが聞いた。

「どうしたんだ、エル？」

エルレインは笑いながら言った。

「いえ、何でもありませんよ。」

スイが人知れず努力をしていることは、キリとファランには秘密にしておいた。

宿に着いて、2人はそれぞれ眠りについた。

エルレインは1人だけ起きていた。

2人が寝静まった深夜に、スイが帰ってきた。

「あれ？エルーまだ起きてたのかよ。」

そういったスイに、エルレインは言った。

「お疲れ様、スイさん。」

「は？」

スイが何か言い返す前に、エルレインは布団をかぶった。

## 第2話：「レッスン2」

「ここらでいいだろう」

ファランが立ち止まって言った。

ここはバレッタの街の外れにある平原。

キリとエルレインは、双戦舞の練習をするために、ファランに連れられて、この平原にやって来た。

「街の外れにこんなところがあったんだな」

「ここでレッスンをするんですか？」

エルレインがファランに聞いた。

「そうだ。これからお前らには、俺が提示したノルマをクリアしてもらおう。」

そう言うと、ファランは自分の服の内ポケットに手をつ突っ込んで、何かを取り出した。

ファランのポケットから出てきたものは、二枚の細長い布だった。

「なんだそれ、ハチマキ？」

「…少し違うな。これは、目隠しだ。今回の課題は『目隠しをしたまま戦う』だ。」

キリとエルレインが同時に「ええーッ!？」と叫んだ。

『Double Arts Legend』  
2：～レッスン2～

「そんなの無理だろお！第一、そんなレッスンやって何が身に付くんだよ!？」

「良い質問だ。」

と、ファランが答える。

「現段階でお前ら二人は、お互いの動きを、目で見て、確認した上で戦っている。しかしそれでは、戦いのプロに対して必ず遅れが出る。」

「…じゃあどうすれば良いんですか?」

エルレインが聞いた。

「お互いの心を一つにするんだ。そうすれば、目で見る事なく戦う事が出来る。」

キリとエルレインは目を合わせて言った。

「…心を一つに…。」

二人は再びファランを見た。

するとファランが二人に目隠しを投げて渡した。

「まずはやってみない事には始まらない。やってみる。」

目隠しを着けようとして、エルレインは思わず笑ってしまった。笑っているエルレインを見てファランが

「なんだ、何が可笑しい？」

と言った。

「いや、やっぱりファランさんって可愛いなって。」

そう言うと、エルレインはファランから受け取った目隠しを指差した。

エルレインが指差す場所には、”可愛い”パンダのプリントが施されていた。

「…ただのパンダちゃんだろう。」

それを聞いて、キリも爆笑した。

「今ファラン、パンダにちゃん付けしたよな！（爆）」

「…いいから始める。」

その後二人は、しばらく笑い倒れた。

…じぼらくして。

「そろそろ怒るぞ。」

ファランが言った。

やっとキリとエルレインは起き上がって、目隠しを着けた。

「よし、じゃあ始めるか！大丈夫か、エルー？」

「あっ！ハイ。大丈夫です！」

「じゃ、いくぞ。」

二人は静かに構えた。

『レッシン……………。』

### 第3話：「コツは…」

『レッツ……………』

二人同時に呟いた。

二人は互いの手をギュツ、と握りしめた。

『双戦舞、ステージ・オン！』

二人はゆっくり動き出した。

初めは上手く踊っていた…かのように見えたが、すぐに…。

「きゃあ!？」

キリの足がエルレインの足に引っかかった。

そのまま二人はバランスを崩しズサア、と転んでしまった。

『Double Arts Legend』  
3：〜コツは…〜

「痛つたあ〜…。」

少し離れた所から見ていたファランが、二人の近くに歩いてきた。

「まあ無理もない。このレッスンはプロのダンサーでも2〜3ヶ月かかるものだからな。」

二人は目隠しを取った。

「2ヶ月！？そんなに待てねえよ！」

フアランとの約束で、課題をクリアするまでは次の街には進めない約束だった。

「どうにかならないんですか？」

「俺は一度決めた事は変えない主義なんだ。早く出発したければ、それだけ早く課題をクリアする事だな。」

フアランが腕組みしながら言った。

「つまり、頑固ってやつだな。」

フアランは否定しなかった。

代わりに、早く続きを始めるように促した。

二人は目隠しを再び着けて、練習を再開した。

そして夕方…。

「あーっ、もう無理！」

キリとエルレインは草むらの上に倒れ込んだ。

どれぐらい練習したんだろうか。

二人の、砂ぼこりで汚れた服や顔を見れば、どれだけやり込んだかは一目瞭然だ。

「結局、出来ませんでしたね。」

エルレインが、額の汗を拭いながら言った。

「なんかコツとかないのか？」

「コツ…か。そうだな、強いて言えば…”お互いを信じる”事だな」  
キリとエルレインは目を見合わせた。

「お互いを信じる…？」

「そうだ、相手の事をどれだけ信じているか、それだけで動きに差が出てくる。」

…ファランはそれ以上何も言わなかった。

「続きは明日へ御預けだ。宿に帰るぞ。」

もう少し練習したい気持ちもあったが、ファランに促されて、一行は宿に帰っていった。

## 第4話：「特訓だ！」

…深夜、漆黒に包まれた寝室。

…：現在1時を回った頃。

キリは眠れずにいた。

エルレインもまた、眠れずにいた。

部屋には、スイのいびきが響いている。

『Double Arts Legend』

4：…特訓だ！…

ふと、キリが呟く。

「…眠れないのか、エルー？」

「…えっ？なんで分かったんですか？」

二人の間には、キリが即席で作った木造の壁があり、互いの顔は見えないはずだった。

「いやー、エルーが寝てたら、そろそろキックが飛んでくるはずだなあ、なんてね。」

エルレインはポカンとした顔をしている。

「??？…どういう意味ですか!？」

「いや…だつてなあ…」

キリが返答に困る。

…：最近エルレインの寝相は最悪だった。

数日前には、二人を隔てている壁を蹴破る程だった。

フレアで強化された彼女のキックには、木造の壁など意味を成さなかった。

「そんな事より、レッスンの事だけどさあ……。」  
キリが話題を変える。

「…このままじゃ、マズイよな。」

「…そうですね。」

なるべく早く協会本部に到着しなければならない。

…こんなところで躓いてる場合ではない。

そんな思いが、二人を焦らせる。

「やっぱりフアランさんに考えを変えてもらうしか…」

「いや、俺達が強くないといけないわけないのも事実だ。もう誰かに護られるなんてゴメンだからな。」

キリがキツパリと言った。

「それじゃあどうしたら…」

二人の間に、一瞬の沈黙が走る。

…キリが口を開いた。

「出来るさ。」

「…へ？」

「短い時間で習得するしかない。」

「でもフアランさんが、プロのダンサーでも3ヶ月はかかるって…」  
エルレインが言い終わる前にキリが言った。

「…エルーとなら、きつと出来るさ。…だろ？」

「…キリさん……。」

…キリさんにそう言われると、不思議と本当に出来る気がしてきた…

「…そうですね。きっと出来ますよね…！」

ふと、キリが起き上がった。

「じゃ、行くか。」

「えっ？行くって…ドコにですか？」

キリはエルレインの顔を見ると、ニツ、と笑みを浮かべて言った。  
「特訓だ！」

第5話：「誓います。」

『Double Arts Legend』

5：〜誓います。〜

『はあ…はあ…』

真夜中の特訓。

気温は低く、かなり寒いはずだが、二人の体からは汗が吹き出していた。

「大丈夫か、エル？」

「大丈夫です…。」

と言いながらも、エルレインは息苦しそうだった。

キリが、一回休憩を取ろう、と言ったが、エルレインは断った。

「本当に…大丈夫ですから…。」

「……………」

いや、絶対大丈夫じゃないだろ…

そう思うとキリは、ハアツ、と溜め息をついた。

そして、急にしゃがんだかと思うと、エルレインの膝裏をごく弱い力で、ポカッと叩いた。

「キャッ!？」

たちまちエルレインは、膝から崩れ、ポフツと尻餅をついてしまった。

「全く…やっぱ限界じゃん。」

そう言つとキリは、エルレインを抱き抱えた。

「えっ！？ちよつと！なにするんですか!？」

「休憩するんだよ、休憩！」

…私なら大丈夫ですから。

と言おうとするエルレインを制して、キリは言った。

「無理すんなよな？エルーは女の子なんだからさ…。」

…そんな優しい目で見つめられて。

…そんな優しい言葉をかけられたら。

…何も言えないじゃないですか…。

キリは、エルレインをベンチに座らせると、隣に自分も腰掛けた。

そして、深く、紅い眼で、エルレインの眼を覗き込む。

エルレインは視線を反らした。

…心の中が見透かされてるようで、恥ずかしかった。

目を合わせようとしないエルレインを見て、怒ってるのかな、なんて思ったキリは黙り込んでしまった。

黙ったまま、夜空を見上げる。

エルレインも黙ったままだ。

…二人の間に気まずい空気が流れる。

「……………」  
「……………」

…どれくらい経っただろうか。

ふと、目を反らしたまま、エルレインが口を開いた。

…キリさんは、ずるいです。」

「へっ!?!」

いきなりエルレインが話し出したので、キリはビクツとした。

「…私ばかり、キリさんに夢中で…私ばかり、キリさんの言いなりで…」

自分が何を言ってるのか、自分でもよく分からなかった。

「エルー、怒ってるの?」

…別に、怒ってるわけじゃなかった。

ただ、心が攪ったかった。

「別に、怒ってないですよ…。」

「なら良いんだけど…」

「…ただ、悔しいんですよ。いつもいつも、キリさんに護られてばかりで…」

キリさんの足を引っ張ってばかりで…。」

やっとエルレインはキリの方を見て言った。

キリもエルレインの眼を見た。

「…そんなことないさ。」

キリが言う。

「エルーが居るから、俺は頑張れる。エルーが信じてくれるから、俺は頑張れる。だから…」

キリは再び空を見て言った。

「ずっと、信じていてほしいんだ。俺もあんなのこと、信じてるから……。」

「キリさん……………」  
エルレインが呟いた。

そして、クスツと笑った。

「！？何が可笑しいんだよ？」

エルレインが動揺するキリの眼を見て言った。

「そんなの、当たり前じゃないですか。私はずっと前から信じてますよ？キリさんの事。」

キリはエルレインの笑ってる顔を見ると、自分も笑った。

「……………そうだよな。」

ふと、エルレインが言った。

「それじゃあ、誓いでも立てますか？」

「誓い？」

「私の故郷では、約束事をする時に、お互い、握りこぶしを作って、軽くぶつけるんです。」

「何で今そんなこと？」

「いいじゃないですか！さあ、早く早く！」

エルレインは手をグーにして、キリの方に向けた。キリも、エルレインに促され、手を握った。

エルレインが言う。

「私達二人は未来永劫、お互いを信じ合うことを……。」  
エルレインはキリが続きを一緒に言ってくれるのを待つ。キリは、分かったよ。と笑い、口を開いた。

『誓います。』

その瞬間、ヒュアアアッと何かの音が聞こえた。と同時に、二人の体が、一気に軽くなった。

「なんだ！？これ！！」

「体が、軽く………？」

第6話：「砂は舞い上がり…。」

「なんだ！？これ！！」

「体が、軽く…？」

二人の体を、目映い光が取り巻いた。  
…が、その光は一瞬で消えていった。

「…なんだっただ？今の。」

当然、エルレインに分かるはずもなく、彼女は首を傾げて言った。

「よく分かりませんが…体が軽くなったような気が…。」

この後も話し合ったのだが、結局この日、二人はこの謎を解明出来ず

に「気のせい」という意見で解決してしまった。

『Double Arts Legend』

6：…砂は舞い上がり…。

「どうするか、もう宿に帰るか？」

少し休憩した後、キリが言った。

「う〜ん…もうちょっと練習していきませんか？」

「大丈夫か〜？また無理してんじゃないか？」

キリが疑わし気に言った。

「大丈夫ですつて！さっき信じてくれるつて言ったばかりなのに、もう疑ってるんですか〜？」

「いや、それとこれとは話が違うような…。」

するとキリは、おっ、いい事考えた！と言って、自分のズボンのポケットに手をつっ込んだ。

え？なんですか？？という顔をしてるエルレインに、キリはポケットから取り出した物を見せた。

「ほら、またまた新しいアプリケ作ったんだよ！今度はセンスが悪いと言われないように本気で作ったからな。」

と言うキリの手握られていたのは、うさぎのアプリケだった。

…酷い、酷すぎる。

「なんですか！！？このうさぎ！恐っ！！こっちガン見してるじゃないですか！…！」

エルレインは過去最悪のアプリケを見てギャーギャー騒いでいる。それを見て、キリはハハツ、と笑った。

「…あれ？今度は落ち込まないんですか？」

笑ってるキリを見てエルレインが言った。

「いや、ツッコミにキレがあるなあーって思ってたさ。本当に無理はしてないみたいだな。」

どうやらキリは、エルレインが疲れていないか見分けるために、アツプリケを出したらしい。

「…でもそこまで言われると泣きたくなってくるな…頑張って作っただけどなあ…」

キリがいじけた。

困ったエルレインは、無理矢理話を戻した。

「キリさん！早く練習しましょうよ？」

「ほつといてくれよ、どうせ俺なんか…」

「ちよつとお〜…キリさあん…」

この時キリは本当にいじけていた訳では無く、困ったエルレインの顔を見ただけだということとは、エルレインには知る余地も無かった。

翌日…

「なあー！もう飽きたんだけどー！そろそろこの街出ようぜー？」

これからレッスンを始めるキリとエルレインにスイが言った。

「…無理だ。数日で身に付けられる技術ではない。」

と、ファランが言ったが、キリは自信満々に言った。

「まあーちよつと待ってるって。すぐ終わらせるからさ。」

「たのむぜえ〜？」

スイがチェリーを頬張りながら言った。

キリとエルレインは目を合わせて頷くと、それぞれ目隠しを付けた。

「それじゃ始めるけど、準備OK？」

「はい、いつでもいけます！」

二人が構える。

砂ぼこりが舞う。

風が吹いて、砂ぼこりはどこかへ飛んでいく。

…二人は、お互いの手をギュツと握り、そして呟く。

『…ステージオン。』

二人は、動き出した。

…驚くほど、静かに踊る二人。

…息は、ピツタリだ。

その頃……。

「な、何をするんです!？」

「出来損ないの弟子はいらん。もう、寝ろ。」

男が言い終わると、アプロは血を吐いた。

「バレッタか……」

男は、静かに立ち上がり、歩き出す。  
彼が歩いた後を、乾いた砂が舞う。

今宵、ラインバークの犯罪者収容所を紅く染めた男、アプロの師が  
動き出したことを、四人はまだ知らない……。

第6話：「砂は舞い上がり…。」（後書き）

第五話までを読んできた方々から、いくつも応援メッセージが届きました。ありがとうございます！これからも頑張ってくださいの  
で、応援よろしく願いします！

第7話：「お前を倒すまで」

「フィニッシュ……!!」

二人は静かに動きを止めた。

何も言わずに目隠しを取り、ファランを見る。

ファランは目を閉じたまま、黙っている。

エルレインの頬を、汗が伝った。

…ファランは黙っている。

風が吹き、キリの髪が揺れた。

…ファランはまだ黙っている。

不意に静かな雰囲気にならなくなったスイが口を開いた。

「なあなあ、どうなんだよ？今の！」

ファランがゆっくり顔を上げた。

四人の間に緊張が走るなか、ファランが口を開いた。

「……合格だ。」

『Double Arts Legend』

7：〜お前を倒すまで〜

キリとエルレインは目を合わせると、同時に笑った。

「やったな！エルー！」

「はい！やりましたね！」

スイが立ち上がって伸びをしながら言った。

「あゝっ！これでやっとこの町を出られるじゃん。それに…」

スイはニヤリと笑うと、喜んでいるキリとエルレインをよそに、ス  
ーッとその場からいなくなった。

ファランだけがそれに気づいたが、いつもの事だろうと思い、特に  
気には留めなかった。

「それにしても、お前ら二人にはいつも驚かされるな。ちょっと真  
夜中に宿を抜け出して特訓したからといって習得出来る技ではない  
んだが…。」

ゲツ、バレてたのかよ。と二人は顔を見合わせた。

本当に驚かされる。

ダンスが出来るとか、相性が良いとかいう問題ではない。  
いったい何が、こいつらを動かしている？

…何が、こいつらに力を与えている？

と、ファランは考える。

ファランが瞑想に耽っていると、エルレインが言った。

「あれ？スイさんは？」

「さあ？早く出発したいから先に帰ったんじゃないの？」

とにかく、だ！

キリが言った。

「俺達も早いうちに出発の支度しようぜ？こんな町でのんびりしてる訳にはいかないんだしさ。」

三人が宿に向かって歩き出した現在、午前9時32分頃…

彼等の元に確実に悪が迫ってきている事を、この時彼等は、まだ知らない。

一時間後…

「結局スイさん、宿にも居ませんでしたね。」

「もうアイツの事なんて放っておいて、出発しよう。」

三人は既に荷物をまとめて、街の出口に来ていた。

宿主に聞いたところ、スイは既に荷物をまとめて飛び出して行ったらしい。

「置いていって平気なのか？」

「ああ、あいつ野生の勘が利くからな。どうせすぐに追い付くよ。」

動物か？アイツは！

なんて、ファランが思っていたその時だった。

不意に辺りに声が響き渡った。

「おいコラ！お前らちよつと待て！」

三人が、またこのパターンか…とっていると、突然スイが空から降ってきた。…と言うより、高い建物の屋根から飛び降りてきた。

「そこの糞カスバッテン髪野郎！アタシとサシで勝負しろ！！」

酷い言われようだ…（汗）

キリとエルレインは同じ事を思った。

「言つとくけど、この前までの私だと思ってたら、やけどするぜ！？」

バツ、つと勢い良くスイが飛び出した。

「ナギンは戦闘種族だ！なめるなよー！」

「ベジータ!？」

「それ言うなら、サイヤ人は戦闘種族だ! だろ。」

キリとエルレインが即座にツツコミを入れる。

「…やれやれ、そんな短期間でいきなり強くなるわけが…。」

と言いながら、ファランがズボンから手を出そうとした瞬間だった。スイはファランの前で急ブレーキをかけて止まり、瞬時にアヴィー（スイの武器、鉄製のフープ）で地面を思いつきり殴った。

石造りの地面が壊れ、石の破片が勢い良く飛び散り、視界を奪った。

「もらった!」

いつの間にかファランの後ろに回り込んでいたスイが、渾身の力でアヴィーを振った。

「……………!!」

だが気付けば次の瞬間、スイは組伏せられていた。

「…アタシ、また負けたのか。」

スイは呟いた。

「また泣くのか?」

ファランが訊いた。

「…なめんな。アタシは、もう泣かない。泣いたって何も変わらないいからな。…そんな暇があったら、強くなれるように努力する。だから…」

スイは一度息をはくと、もう一度大きく息を吸って言った。

「もうアタシは、お前を倒すまで絶対に泣かない！」

ファランは、フツと笑うと呟いた。

「そうか。…強いな。」

スイは、ファランの意外な言葉に戸惑った。

「なっ！？何言ってるんだよ？そんなの当たり前だろ！アタシはクリアナギンなんだし…」

「…そうか。」

「…てゆうかどけよ！いつまでアタシの上に乗ってるんだよ、変態！」

ファランは黙ってスイを放した。

スイは舌打ちすると、足早にどこかへ歩いて行ってしまった。

「おいスイ！もう出発するんだけど…」

とキリが、言い終わらない内に、ファランがそれを制した。

「放っておけ。今は、一人にさせておけ。」

歩きながらスイは考えた。  
なんだ、この気持ち…。

強いつて言われて、こんなに嬉しかったこと、あったらどうか。

…何考えてんだアタシ。

ホント、馬鹿馬鹿しい。

その頃キリ達は…

「んじゃ、今度こそ出発するか。」

キリが靴を履き直して言った。

一行はゆっくりと歩き出す。

協会本部への道程は、またまだ長い。

彼等の旅は、まだ始まったばかりである。

## 第8話：「考え事」

辺りは、刻々と夜に近付いていた。

紅く燃える太陽も、地平線に隠れ始めた頃、誰もいない道を歩く三人の影。

…次の街は、未だ見えない。

「あー、疲れた。いつになったら次の街に着くんだよ…。」

「流石に疲れますね、これだけ歩くと。」

愚痴をこぼす二人の後ろを、ファランは黙って付いていく。

今のファランの耳には、二人の会話など、ほとんど入っていないかった。

…考え事をしていたのだ。

…俺は、何か変わったのか…？

『Double Arts Legend』

8…〜考え事〜

あの日、あの夜、確かにティセラは言った。

コイツらと一緒に居れば、俺の運命は変わると。

ただ、ファランが自分で把握している範囲内では、自分に特に変化があったとは思えない。

「おーい、ファラン？」

…本当に俺は、このままでいいのか？

「ファランさん？」

いや、テイセラの予言が外れないことは、俺が一番よく知ってるはずだ。

実際、五年前のあの時も…。

「聞いてんの？ファラン！？」

「…ん？ああ、すまん。」

この時になって、ようやくファランはキリ達の呼び掛けに気付いた。

「どうしたんですか？何かボーツとしちゃって…ファランさんらしくないっていうか…。」

「…いや、なんでもない。」

「まあ、どうでもいいけどさ。所で、次の街はまだな訳？」

「何を言ってる？今日は野宿だ。」

『……………』

キリとエルレインが二人同時に顔をしかめた。

「…今……………何て？」

「だから、今日は野宿だ。」

…

…

…

…一瞬の、静寂。

そして…

『ええええええ絵ええ得え！！！！？？』

…騒ぐ。

「ちよつとお！？聞いてねーけど！？」

「野宿つて…まじですか…。」

「…お前ら、旅をなめてるのか？」

フアランが溜め息をついた。

旅をする上で、野宿は必ずしなければならぬ。

「時間も時間だ。今日はここらで野宿にする。」

「でも、どうやって火とか起こすんですか？」

「その点は心配することは無い。俺も以前は旅をしていたからな、賢い火の起こし方ぐらいは心得ている。」

エルレインが聞くと、フアランは服の内ポケットから何かの袋を取り出した。

その袋の中には、何かの粉が入っていた。

「おいお前ら、そこら辺から木の枝を拾ってこい。なるべく多くだ。」

」

……数分後。

「あー、疲れた。こんなもんでいいのか？」

「……十分だ。」

ファランは積まれた木材の上に、先程の粉を振りかけると言った。

「おいお前ら、危ないから少し離れておけ。それと、旅ではよく使う方法だ、しっかりと見ておけ。」

キリとエルレインが後ろに下がる。

ファランが、すーっと息を吐いた。

場に緊張感が走る。

…

……

……

「……………!!」

ファランが勢いよく木材を殴り付けた。

同時に、木材が爆発したように燃え出した。

「……………え、と…これって？」

「火薬を振りかけた木材を殴る、それだけだ。簡単だろう？」

キリとエルレインは顔を見合わせた。

完全に、ファランにしか出来ない力技じゃん…。

本当に、ファランは時々アホだ。

街で買っておいた食料を食べ終え、火を囲む三人。

やはりここでも、ファランは考え事。

そんなファランを見て、今度こそキリとエルレインは、様子がおかしいと思う。

「…なあ、ファラン？さっきからボーッとしてるけどさ、何か悩みでもある訳？」

「…全く、お節介な奴だ。」

ファランが溜め息をつく。

「どうやら、”何でもない”では納得してくれそうに無い雰囲気だ。だがコイツらの目の前で、”本当にこのままお前らと旅をしているのか考えていた”なんて言えない。さて、どうしたものか…。」

「…不意に、辺りに”気配”が走った。

ファランが顔を上げる。

「……………？…どうしたんだ？」

キリとエルレインは、まだ”気配”に気付いていない。

しかし、確かにその場に漂う悪の気配を、ファランは感じ取っていた。

「…どうやら…敵襲のようだ。」

「…えっ!？」

「…敵って…何人くらいだ？」

「一人…だ。ただし、かなり腕が立つと見た。」

キリの頬に汗が伝った。

風が吹き、火が消える。

エルレインがキリの手を強く握った。

緊張した現場に、声が響いた。

「おやおや、腕が立つとは…そう言ってもらえるとは、嬉しい限り。流石はアプロを倒しただけの事はある。私の気配を察知し、実力まです量るとは。」

## 第8話：「考え事」（後書き）

お待たせしました！八話です！PSYRENの短編書いてたもので、少し更新が遅れました。もっとダブルアーツの短編が読みたい、という意見も貰ったので、もしかしたら次も遅くなるかも知れませんが、すみません（汗）応援して下さいの方々、これからも頑張りますので、よろしくです！

## 第9話：「パーティーに誘われて」

「初めに名乗っておこう。私は”コブラツイスト”。まあアブロの師、といった所だ。」

「コブラツイスト…。」

キリが呟いた。

そして、汗をダラダラ流し、体を震わせながら言った。

「いつもエルーが真夜中にやってくるあの技…!?!?」

「……え？何ですか、それ？」

キリが溜め息をついた。

(ホントに何も覚えてないのね…この人。)

キリが、今はその話はいいや、と目で返事をした。

『Double Arts Legend』

9：～パーティーに誘われて～

「おい、初めに言っておくが、コブラとか言うこの男…お前らよりも強いぞ。それに、俺はいつも通り戦う気はない。さて、どうする？」

ファランが言った。  
キリが答えるより早く、辺りに声が響いた。

「どうする？」と言ったのかな？残念、君達は勘違いしているよ  
うだ。選択の権利は君達には無いのだよ。ただ…」

風が吹き、木が揺れた。

”後ろ”から声がした。

「付いてくればいいのだ。」

『…………え？』

二人同時に呟いて、振り向いた時には既に、コブラは腕を振るって  
いた。

コブラの手刀が二人の首筋にヒットすると同時に、キリとエルレイ  
ンの体に、鈍い衝撃が走った。

「…………つぐあ!?!」

「…………つツあ!?!」

呻き声と共にキリとエルレインの体が傾いた。

そのまま地面に倒れ込んだ二人。

二人の視界は、徐々にぼやけていった。

倒れた二人の体を肩に担いで、コブラがファランに言った。

「やはり、手は出さないかね？」

「…………俺は闘わん。お前が俺を狙っているなら別だがな。」

「…狙って欲しいか？そうすれば、闘う意味が生まれる。自分を縛る掟を気にすること無く、コイツらを護ることが出来る。違つか？」

「……………」

フアランは黙った。

否定しようと思ったのだが、しなかった。

”何故か”確かに心の中には、狙われるのを望んでいる自分がいた。

「…残念だ。君が来ればパーティーが盛り上がるだろうに。」

「…パーティー？」

「ゼズウさんの命令でね。コイツらの”強さ”を計れ、何て言われたもんで、少し部下達と遊ばせようと思ってね。」

コブラがニヤツと笑った。

「まあ、気が変わったら是非来てくれたまえ、パーティー会場はウエルスの街、闘技場地下だ。」

「行く気は…無い。」

「…だろうな。何せ五年前、あんなに痛い目を見たんだからな。」

「……………!!」

その場を去ろうとするコブラに、フアランは聞いた。

「お前…………」あの事”の何を知っている…？」

コブラの悪戯な目がファランの眼を捉えた。  
そして、軽く笑みを含みながら答えた。

「なに、私もあの戦いの参加者だった。それだけだ。」

それだけ言うと、コブラは闇の中に消えていった。

ファランは、しばらくその場に立ち尽くした。

第9話：「パーティーに誘われて」（後書き）

まず、皆さんに謝りたいです。バトルを望んでた皆さんもいるでしょうが、お預けです（汗）すいません！次の次位には書きますんで、もうちょい待ってください。あと関係無いんですが、明日私の誕生日です。やったー！

## 第10話：「仲間の定義」

「ん、多分こっちだな。前髪バツテンのうっせえ臭いがする。」

スイは一人歩いていた。

キリとエルレイン、そしてファランとは、はぐれてしまったが場所は大体分かっていた。（臭いで）

もうかなり近いようだ、薪の臭いがする。

案の定、目を凝らすと木の影にファランの姿が見えてきた。しかし、キリとエルレインの姿はない。

スイがファランに近づいていくと、ファランが顔を上げた。

「お前だけか？キリとエルーはどうしたんだよ？」

「いや、その前に…お前、どうした？」

「は？」

「髪…短くないか？」

スイの髪が、短くなっていた。

地に付く程の長さだった髪は、肩胛骨の所位までのセミロングになっていた。

『Double Arts Legend』

10：～仲間の定義～

「はあ！？連れ去られただあ？」

スイが盛大に怒鳴った。

「で？お前は何やってんの？護衛やってんじゃないのかよ？」

「…俺は護衛ではない。あいつらが負けようが、戦いに行ったりはしない。」

「…んだよ、それ…。バカじゃねえの？」

スイがペツと、地面に唾を飛ばした。

「他人の為に力は使わん。何度も言っているが、破る気は無い。」

「…あっそーかよ。アホらしい、付き合ってらんねえ。」

スイはクルリと後ろを向くと、歩き出した。

「どこへ行く？」

「何言ってるんだよ？助けに行くに決まってるんだろ。」

ファランの方を振り向かず歩いたまま答えるスイ。  
せかせかと歩くスイを、

「まで。」と呼び止め、ファランが聞いた。

「何故お前は、アイツらを助ける？何の為にアイツらを護る？」

「なぜって…そりゃあ、”仲間”だからだろ。」

スイがサラツと言ったこの言葉が、ファランにはとても重く感じられた。

”他人の為に力は使わない”という掟を自分に課して以来、ファランはずっと”仲間”という言葉から遠ざかっていた。

護りたい人を護れないのは、精神的にかなりの苦痛だ。

ファランは本能的に、護りたい人、つまり仲間を作ることを避けていた。

「…一つ聞いて良いか？」

「ああ？何だよ、あたし急いでんだけど？」

と、言いながらもファランの質問を待つスイにファランは聞いた。

「…お前にとつて”仲間”とは何だ？」

スイが、うん？と腕を組みながら答えた。

「…ん、そりゃあ何っーか…”護りたい”とか”死なれたら困る”とか思う奴だっり、相手が仲間だと思ってくれてりゃあ、仲間だろ。」

「……………」

同じだった。

五年前までのファランは、今のスイと全く同じ様に考えていた。

恐らく、キリやエルレインに聞いても、似通った答えが帰ってくるのだろう。

「てか、何でアタシがお前みたいなバツテン頭の質問に答えなきゃ

なんねーんだよ。もう行くからな、アタシ。」

「…悪かった。行くなら行け。」

スイは

「ケツ、礼も無しかよ」とボソボソ呟きながら走り去った。

再び一人になったファランは、スイの言葉を思い出していた。

「護りたい奴が、仲間か。」

今のファランには、自分がどう思っているか分からなかった。

仲間だから、護る。

護りたいから、仲間。

…自分は、アイツらの事を護りたいのか？

もし、本当に護りたくなかった時、自分はどうするんだ？

…分からない。

溜め息をついた。

「お前らはどう思う？シルファ、アルフレッド、それに…レイ。」

空を見上げた。

再び地平線に目線を戻すと、ファランは歩き出した。ウェルスの街、地下闘技場。

行ってみれば、何か分かるかもしれない。

…歩き出して数十秒後、ファランは気付いた。

「…しまった。」

スイに、キリとエルレインの居場所を教えるのを忘れていた。

…やってしまった(汗)

## 第10話：「仲間の定義」（後書き）

今、海にいます。そうです、旅行中です。いつもと違う環境で小説作りがせかせかと進んだので、連日投稿することが出来ました。次話は、とうとうバトル展開。書けるかどうかガチで不安です（汗）それと、スイが髪を切った理由は、もう少し先になります。お待ちを。

## 第11話：「毒蛇の麻痺牙」

「……………んっ。」

エルレインは目を覚ました。  
痛い。

頭が、痛い。  
意識がぼーっとする。

目の前のぼやけた視界が、だんだんとはっきりしていった。

「……………ここは…？」

『Double Arts Legend』

11：…毒蛇の麻痺牙

部屋…というよりは、闘技場。  
使われなくなつてから随分経つのか、何となく手入れは行き届いていない様に見えた。

「…あれ、起きた？エルー。」

後から声がした。

後ろを向こうとしたが、向けない。

二人は、背中合わせに椅子に縛られていた。  
親切にも、手はしっかりと繋がっていた。

「キリさん…ここは…？」

「いや、俺だって分かんねーけどさ、どうやら捕まった感じ？」

二人が話し合っていると、不意に闘技場の中に声が響いた。

「お目覚めかね？ようこそ、我がパーティー会場へ。」

「……どこから、声が？」

「あそこだよ、あそこ。」

キリが見ていたのは、闘技場の客席だった。

客席に座っていた男が立ち上がった。

筋肉モリモリ、と言うよりは、ファランのような体型。

白いズボンに、上半身は裸に白衣。

白衣のボタンを全く止めておらず、露出した体には蛇の刺青が施されていた。

声から察するに、恐らくコブラとかいう男だろう。

「俺達をどうするつもりだ？」

キリが落ち着いた口調で言った。

するとコブラは、よくぞ聞いてくれた。といった顔で言った。

「本部からの命令は」キリルチルをガゼル本部まで送る。輸送部隊が来るまでの間、キリルチルを拘束し、輸送部隊の到着を待つだ。だが……。」

コブラがニヤーっと笑う。

「ゼズウさんから”特別任務”を預かっているのだよ。その内容と言つのが…」

「ゼズウ…!!」

”ゼズウ”という言葉に、キリとエルレインが反応したが、コブラは構わずに続ける。

「力試しだ。”あの力をどれだけ使いこなしてるか知りたい”とか何とか言っていたな。」

「ちよつと待て、”あの力”って何なんだ？お前らは”この力”の何を知ってる？」

コブラは、自分の話を中断されたのが気に食わなかったのか、怪訝な顔をした後、首を傾げた。

「さあな、俺が知ってる筈無いだろう。そういう話は、本部に着いてからゼズウさんとゆつくりしてくれたまえ。」

少し嫌みがちに言った後、コブラはパンツ、と手を叩いた。密閉された闘技場に、その音が響き渡る。

「さて、そろそろパーティーを始めよう。だがその前に、パーティーをより盛り上げるための素晴らしいプレゼントを用意した。受け取ってくれたまえ。」

コブラがパチン、と指を鳴らすと、闘技場内に煙が充満し始めた。コブラはゆつくりと自分の足元にあったガスマスクを付けた。

「……！！……何ですか…コレ!？」

「吸うな！エルー！！」

コブラがガスマスクの下から発した曇った声で嘲笑う。

「無駄だ。君達には3分間この麻痺ガスを吸ってもらおう。コイツを吸うと、体の末端、つまり手などの神経が麻痺する。聞くところによると、女の方は手を繋いでないと死ぬらしいな。」

「……………ッ！！」

「どうだ？手を繋いでいる感覚が無くなってきただろう。フハハ、実に面白いパーティーになりそうだ。」

…………… 絶体絶命

第11話：「毒蛇の麻痺牙」（後書き）

文章最初の「……………んっ。」っていうエルのセリフをエロく感じてしまうのは、私だけでしょうか！？…なんて話は置いといて、だらだらとコブラさんが喋ってるだけの話になってしまってますいません。絶体絶命、今回はバトルです。

第12話：「信頼・敵・カラス」

「フハハ、実に面白いパーティーになりそうだ。」

コブラの低い声が場内に響いた。

「ゲホツ…ケホツ…キリさん…」

手の感覚が無い。

手を繋いでいないと死んでしまうエルレインにとって手の感覚が無いというのは、とてつもない恐怖である。

不安

恐怖

エルレインの心が、負の感情に侵食されていく。

しかし、エルレインは独りでは無い。

隣にはいつも、キリがいる。

「大丈夫。」

キリが呟いた。

「大丈夫。大丈夫だから、エルー。」

『Double Arts Legend』

12：信頼・敵・カラス

「大丈夫って…でもどうするんですか？こんな状況で!？」

今、二人が奪われてるのは”触覚”。

それは、相手の手を握っているのか、握っていないのかが認識できない事を意味する。

下手に動けば、気付かぬ内に手が離れていた、なんて事にもなりかねない。

「しっかり手が繋がっているかどうか、いちいち確認しながら闘うなんて無理なんですよ!？」

「いつも通りに動けばいいさ。」

キリの眼が、エルレインの眼を捉える。

「……え？」

「エルーが手を動かした先には、絶対に俺の手があるから。エルーが手を動かしたって思った位置には、絶対に俺の手があるから。信じてれば、いつも通りに動けるだろ？」

約束しただろ？

と、キリが笑う。

「で、でもそれって……!!」

「あれ〜？じゃああれは嘘だったのか？」信じてます。当たり前じゃないですか”って。」

「そ、それはあ……」

「……………」

「……………ッ。」

沈黙。

キリは、ただただエルレインの眼を見詰めている。

沈黙。

エルレインは、ただただキリから眼を離せずにいる。

沈黙。

キリが、優しく笑った。

「大丈夫だろ？」

低く、優しく、甘い。

そんなキリの魔法のような言葉に、エルレインの顔は赤くなる。

「…ありがとう。キリさん…。」

「え？今、何て？」

「…何でも無いです！」

そう、隣にはいつも…キリがいる。

きつと、大丈夫だ。

それだけで、そう思えた。

「いやあ、実に素晴らしい。」

ガスのせいで姿は見えないコブラの声が響いた。

「私はね、君達のような夢見がちな奴を見ると、ついテンションが上がってしまうのだよ。」

段々とガスが消えていき、視界がはっきりしていくが、陰湿な笑い

声を響かせている主の姿は、依然として見えない。

不意に、キリ達を椅子に縛り付けていた縄が緩んだ。

「3分だ、パーティーを始めようか。早く見せてくれたまえ、自分達の夢がいかにバカらしかったかを痛感した瞬間の、最高の顔を。」

ガスが完全に消え去り、視界がハッキリとした。

周囲には、敵、敵、敵。

その敵達は、武器を持っていなかった。

キリ達を殺さないように命令されているのだろう。

いつの間にかほどかれた縄。

感覚の無い二人の手を繋ぐ物は、何もない。

にやけながら二人を取り囲む敵の人数は、ざっと10人ほど。風すら吹かない闘技場の中、囲まれた二人。

高鳴る鼓動、駆け巡る血液。

緊張の中、コブラの手が上がった。

ズサア、と構える少年・少女。

にやける毒蛇が、開始の合図を放った。

「やれ。」

敵が一斉に地面を蹴り、ズサア、という音が次々に聞こえた。

「行くぞ、エルー!!」

「はいッ!!」

右から、左から、正面から、後方から、上空から。

次々に襲いかかる敵、敵、敵。

『プログレッシブ（前進）』

二人同時に言うと、舞うように前方の敵の懐に潜り込む。フレアで強化された脚力が、驚異のスピードを生む。敵が反応した時には、既にキリが蹴りを放っていた。

ドゴオッ!!

鈍い音と共に、敵の体が宙に浮く。

倒した敵の後ろには、既に違う敵が控えていた。蹴りを放ったばかりで体勢が崩れているキリ目掛けて、敵の蹴りがキリを襲う。

バキィッ、と蹴りが顔面にクリーンヒットする音が響いた。

だが蹴られたのはキリではなく、敵の方だった。

キリを護るように立ち塞がったエルレインの蹴りが、綺麗な曲線を空に描き、敵を蹴散らす。

「前にはつか気い取られていいんかいなあ!!?」  
後方、空中から次々に敵が襲いかかってくる。

体勢を整えたキリが、鋭い後ろ蹴りで後方の敵を倒し、その敵を踏み台にして飛んだエルレインとキリ。

「馬鹿があ!!空中じゃ身動きはとれん!!」

「どうかね?」

「あなたも同じです!」

敵の踵落としがエルレインの頭をかすめた。  
しかし、キリが空中でエルレインを抱き寄せ、かわした。

「二人いれば空中でも戦えるっての!」

エルレインの踵落としが敵を捉える。

ドゴオツ!と地面に叩きつけられた敵。  
その横に、二人は華麗に着地した。

感覚が無い筈の手。

しかし二人には、しっかりと分かっていた。

あんたの手が、そこに有ることが。  
あなたの手が、そこに有ることが。

信じ合っていたから。

アイコンタクトをしている訳でもない。

それでも、あんたの動きが手にとるように分かる。  
それでも、あなたの動きが手にとるように分かる。

見ていなくたって……。

信じ合っていたから。

キリは辺りを見回した。

初めは10人ほどいた敵。  
何人かは倒した筈なのに、その数は増えているように見えた。

「なんか、増えてませんか？」

「どんどん新手が出てくるって訳か。」

囲まれた、二人。

囲む、敵。

楽しむ、毒蛇。

天井には、一羽のカラス。

どこからともなく入り込んだカラスが、誰にも気付かれる事なく、  
紅い眼光を光らせていた。

「大丈夫か？エルー？」

「はい、行けます！」

毒蛇の楽し気な表情からは、余裕が見てとれた。  
どうやら、パーティーは始まったばかりのようだ。

『レッツ……。』

第12話：「信頼・敵・カラス」（後書き）

どうもです、とうとう始まりました「戦闘」いかがでしたか？難しいですね、戦闘シーンを文で書くのは。人生初の試みですよ。戦闘について、意見や感想をくれたら嬉しいです！（勿論不評でも構いません（汗））では、次話も頑張るのでよろしくです！

### 第13話：「ナンデキミハ」

「…どこだ？ココ。」

空は真つ暗。

周りは木だらけ。

まるで、この世界に自分しかいないような、そんな静けさの中、佇む（たたずむ）黒髪セミロング娘、スイ。

…完全に、迷った？

『Double Arts Legend  
13：～ナンデキミハ～』

『…っはアツ…はぁッ…！』

50人は軽く倒しただろうか。

その中には、武装した敵兵も幾人かいた。

肩で息をする二人。

末端神経が麻痺した状態での戦闘は、案の定辛いものだった。

床に転がって呻いている輩を片付ける敵兵。

キリの頬からは血が滴っていた。

「大丈夫か？エルー。」

「私は平気ですけど…そんなことよりキリさんの方こそ…」

エルレインの体には、傷ひとつ付いていない。

でもそれは、キリがエルレインの事を最優先して戦っているからであって…

本当の事を言うと、エルレインはその事を快く思っていない。

自分の為に愛しい人が傷付いていると言うのは、それだけで辛いものだった。

…だが、今はそんなことを言っている場合ではない。

目の前の敵に全力で向かっていかなければならなかった。

…ふと、二人はあることに気付く。

さっきまで二人を取り囲んでいた敵が、どンドン闘技場裏に引き上げていく。

気が付けば、回りには誰もいなくなっていた。

闘技場に、苛ついたコブラの声が響いた。

「60だ。」

「…は？」

コブラは怪訝な顔をしたまま、キリとエルレインを交互に指差した。

「君達が倒した我が部下の数が60人だと言っているのだ。流石にこれ以上やられてしまっただけは私もつまらんし、ゼズウさんに何を言われるか分らん。」

つまり、と言いながらコブラが立ち上がる。

「沈んでくれ。」

コブラが言うと、闘技場の入場口のような所から、新たな敵が二人出てきた。

「…デカ…過ぎません!？」

「…デカイな。」

二人の前に立ち塞がったのは、二人の大男。

その大きさは大人三人分、と言っても過言は無いほどだ。

「私は苛ついているぞ、お前達。」

「わーかってますよ。黙らせりゃ良いんでしょっ?」

「こんなガキ二人組、わっしらが出るまでも無いと思ってたんです  
がねえ。」

キリとエルレインが構える。

コブラが二人組に、殺すなよ、と釘を刺した。

「来るぞ、エルー!!」

「殺しちゃいかんのか…。まあ、骨数本で我慢するか。」

「じゃ、半殺しって事でえ!」

二人を挟むように陣形を組んだ二人が同時に突っ込んできた。

ゴオオツ!と巨体が風を裂く音が聞こえた。

敵の一人が大木のような太い腕を横に振ってきた。

体勢を低くし、それをやり過ごした二人の元に、間髪を入れずにも  
う一人の拳が飛んでくる。

『バックステップ（後方飛び下がり）!!』

バツと後ろに飛び下がり間一髪拳を避ける二人。

さっきまで二人がいた場所に、岩のような拳が降り注ぎ、ドゴオツ  
!と地面にヒビが入った。

「おいおい、破壊力ありすぎだろ!!?」

「一発喰らったらやばいですね…。」

「よそ見していると死んじまうぜえ!!?」

降り注ぐ流星群の如き連続攻撃。

敵の拳が当たった地面が次々と陥没していく。

突然目の前の敵が後ろに飛び下がったかと思うと、もう一人の敵が飛び下がった敵を飛び越えて、空から降ってくる。

「喰らえやあ!!」

敵の踵が頭上ギリギリに来たところで、二人はヘッドスライディングで危なっかしく攻撃をかわした。

ガシャアツツ!と地面が抉れ、砂埃が辺りに舞った。

「…ツぶね!」

「この人達、大きいだけじゃない…。」

敵の一人がニヤリと笑う。

「デカイ奴はトロい、何てのは昔の考えだ。デカイからって遅くなる道理は無え。」

「そーいうわけじゃけえ。逃げ回ってばかりいるアンタらに勝ち目はねえぞ、と！」

二人がバツ、と勢い良く左右に別れた。

右に行った方の敵が、闘技場の壁を蹴って、その反動で突っ込んできた。

地面スレスレに、地面平行に、放たれた蹴り。

…それを上に飛んでかわしたのは、正しい判断だった筈だった。

…正しかった筈だった。

…しかし、其れは正しくは無かった。

…畏だったのだ。

「御愁傷。」

二人が飛んだ上空に待っていたのは、もう一人の敵だった。

脚だった。

蹴りだった。

さながら、オーバーヘッドシュートのような体勢で待ち構えていた敵の、絶望のシュートが放たれた。

「危ねえ!!! エルー!!!!」

手が、離れた。

「……………え？」

キリはエルレインを投げ飛ばしていた。

身動きがとれない空中で、あの状況で、攻撃をかわすことが出来るのは、どう頑張っても片方が限界だった。

だからキリは、エルレインを投げた。

攻撃の届かない、遠くへ。

……トオクへ、トオクへ。

《キリさん、危ないって言いましたよね？じゃあ何でキリさんは、蹴りを受けようとしているんです？何で私を助けたんです？》

何で、何で、何で？

ナンデ、ナンデ、ナンデ？

キリが、どこか遠くへ行ってしまう気がした。

メキツ、と響く、低い音。

瞬間、地面に向かって吹っ飛び、叩きつけられる君。

ドゴオン……！！

なんていう音も、エルレインには聞こえていなかった。

自分が地面に落下したのも気が付かなかった。

ただ、キリが落下した場所を見つめていた。

砂煙で見えない君。

気が付けば、叫んでいた。

叫んでいる自分にも気が付かなかった。

それでも叫んでいた。

「…………ツキリさん…………!!!!!!」

ナンデキミハ、ワタシヲ庇った？

第14話：「一緒に生きよう」

「御愁傷。」

「一人目脱落う。」

砂煙が消え、姿を現したのは見たくはなかった姿だった。

「キリさん！！！！」

ドクン、と心臓が止まりそうになったのは、トロイのせいだったのか…？

苦しい発作も、消え行く体も、何も辛くはない。

今辛いのは、君を失う事だった。

『Double Arts Legend』

14：～一緒に生きよう～

走り寄る。

君の元へ、走る。

エルレインの頭にはそれしか無かった。

走る。

走る。

走る。

突然、膝の力が抜けた。

既に足が透明化していたのだ。

ズサア、と盛大に転んでしまったエルレイン。  
痛みは、無い。

痛いのは心で…。

恐怖でいっぱいだった。

「キリさん……！！」

段々と動かなくなる体。

もう手を伸ばしても、キリには届かない。

「体…何でッ！！？」

何で動かない？

君が目の前に倒れているのに。

私のせいで、君が倒れているのに。

君が…君の事が、好きなのに。

エルレインは顔を伏せた。

視界が霞んだ。

「やっぱり、無理………だったのかな……？」

流れる涙と共に、消えていく体温。

…このまま、終わるんですね。

「終わらねえ。」

温かみが、広がった。

「!!!?」

敵が、ざわめく。

体が動く。

エルレインが顔を上げると、キリが自分の首筋に手を伸ばしているのが分かった。

「大丈夫かよ、エルー？顔、傷だらけだぜ？」

何で…

何で、立っているんですか？

何で、私の心配をしてるんですか？

大丈夫じゃないのは、アナタなのに。

「転んだんだろ？間抜けだなあ、エルーは。」

アハハ、と笑うキリ。

顔は血だらけで、腕は変な方向に曲がっていて…。

何で、笑っていられるんですか？

「何で……ですか。」

うつ伏せのまま、砂をギュッと握った。

「何で、私の為に死んでしまうような事するんですか……何で、そんなに傷付いて笑ってられるんですか……。何で、何で……。」

「死なねえって、ホラ。」

キリが自分の胸を叩いた。



「俺は、あんたより俺の方が大切だなんて、思っ  
てない。あんたを助けたのが、馬鹿な事だ  
ったとも思っ  
てない。」

「……………。」

「もう止めよう、そう  
いうの。俺の方が大切  
とか……。一緒だ。一  
緒に生きよう。」

「……………ッ……！」

「じゃあさ、こうしよう。  
エルレイン、アンタが死  
んだら、俺は自殺す  
る。」

「……………！！？……何をッ……言  
ってるんですか……。」

「そうすりゃあさ、俺の  
方が大切とかもう言え  
ないだろ？」

「……キリさん……ッ。」

「大丈夫だって。俺は死  
なないし、あんたも死  
なせない。一緒に生  
きよう。」

キリが、エルレインの手を強く握った。

エルレインも、強く握り返した。

それだけで、十分だった。

心はヒトツニなった。

ヒュアアアアアッ…!!

体が、軽くなった。

二人、信じ合うと誓った夜と同じ、あの感覚。  
体が軽くなっていく。

「見ろ、エルー！傷が…。」

「……ッえ!？」

キリの体の傷が、見る見る内に塞がっていく。  
折れていたであろう腕が正しい方向に固定されていく。

「これって……!!!？」

「よくわかんねえけど…力が、湧いてくる感じ…?…これは…フレアの手カラなのか？」

「どうなってやがる…!？」

敵も、驚きの色を隠せない。

「何で立っけていられる!？」

「うるたえるな、叩き潰せ！」

コブラの怒号が場内に響く。

「フン、回復したから何だ!？結果は同じだ。」

「その通り、我々が負ける道理は無い！」

二人目掛けて飛び出した二人。

「生きるぞ、エルー。」

「はー。」

「潰れるや!!」

キリとエルレインが地面を蹴った。

第15話：「鼠と蛇」

「生きるぞ、エルー。」

「はい！」

生きる。

生きる。

君と共に、生きて行く。

『Double Arts Legend』

15：鼠と蛇

敵は、キリとエルレイン目掛けて走っていた筈だ。  
現にさつきまで、敵が向かっていた場所には、二人がいた。  
しかし気付けば、そこに二人はいなかった。

二人は敵の後ろにいた。

「……………は？」

『スイベル（回転）！』

ボガアアアン！！！！！！

気付けば、巨体は吹っ飛んでいた。

小さな、16歳の二人の蹴りで。

「…………ツガハアツ…………！！！」

壁に叩きつけられた敵は、動かなくなった。

「……………つな！？」

戸惑うもつ一人の敵。

「お前ら、何を…」

敵が言い終わる前に、いつの間にか二人は、敵の目の前に居た。

『クロスシャッセ（交差反転）！！』

放たれた蹴りは、重い一撃。

それ程までに、その蹴りに込められた想いは重かった。

ボガアアアアーン！！！！！！

一瞬だった。

たったの5秒の内に、二人の巨漢は倒れていた。

自分達にも訳が分からない力が、次へ次へと湧き出てくる。恐らく、フレアの力なのだろうが…それにしても、大きすぎるチカラだった。

麻痺していた筈の手先も、今でははっきりと感覚があった。キリの傷を直した治癒力は、毒にも効果があるようだ。

「フン、詰まらない。実に詰まらないパーティーだ。」

コブラが静かに言った。

「おい、その二人を片付けろ。」

コブラが命令すると部下が数人出てきて、倒れている巨漢二人組を闘技場裏に引きずり込んだ。

今や、闘技場に立っているのは二人だけだ。

「パーティーは終了だ。詰まらないパーティーで済まなかったな。君達には此処で沈んでもらう。」

二人を睨む、毒蛇の眼光。

しかし二人の目の輝きは、決意に満ちていた。

「俺達は……。」

「私達は……。」

『一緒に生きる!!! / 一緒に生きます!!!』

コブラがフン、と鼻を鳴らした。

「君達は詰まらん幻想の中で溺れる定めなのだ。」

手を上げる毒蛇。

同時に紫色の雨が降り注いだ。

「高濃度の毒液だ。君達を死ぬ直前、地獄の縁までご案内しよう。」

二人は雨の中立っていた。

体から、ジュウツツ…と言う音が聞こえる。

しかし、辛くはない。

痛くも、苦しくもない。

毒が体を蝕む早さを、フレアの回復力が凌駕していた。

降り注ぐ毒雨の中、二人の眼は毒蛇の眼を捉えていた。

「…何なのだ、そのチカラは？…何なのだ、その眼は？」

「お前を、倒す眼だ。」

キリの言葉に、コブラが笑い出した。

「フハ、フハハハハハハハハハ！笑わせるな！お前らがこの私を倒す？それこそ甘い幻想！！ネズミは蛇には勝てないのだよ！！！」

二人の眼は、揺るがない。

コブラがもう一度手を上げると、毒雨が止まった。

「良いだろう、その甘過ぎて虫歯になりそうな幻想を私自ら砕いてやろう！！悦びたまえ！！」

コブラが白い錠剤のようなモノを飲み込んだ。  
恐らく、抗毒薬だろう。

観客席にいたコブラは、白衣を脱ぐと二人の目の前に飛び降りてきた。

「始めようか？ネズミ諸君。」

「終わらせましょう、キリさん。」

「ああ。」

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

スイは走っていた。

キリとエルレインらしき匂いを嗅ぎ付けたからだ。

「……………ん？」

ふと、立ち止まったスイ。

真っ暗な森の中に、倒れている人影を見つけたからだ。

スイはその人影の主の元に、近付いて行った。

「おい、どうしたんだ！？お前。」

女だった。

歳は、スイと大差無いだろう。

かなり息が荒く、苦しんでいるように見えた。

「って、腹から出血してんじゃねえか！何なんだよ、お前！？」

女は、囁くような声で何かを言っている。

「ああ？聞こえねえよ？」

女の口元に耳を近付けると、微かに聞こえた絶え絶えの声。

「……仲間が……皆……皆ッ……!!」

静かな森の中、悲痛な声だけが虚しく、弱々しく響く。

「……殺……された。」

「……ッはぁ!!……?」

## 第15話：「鼠と蛇」（後書き）

驚く程筆が進んだんで、三話一挙投稿になりました。

かなりシリアスな雰囲気を作っているつもりなんですけど、どうでしょう？

次話、コブラ編完結…かな？

第16話：「進む」（前書き）

後書きにて特別画像公開！

第16話：「進む」

「終わらせましょう、キリさん。」

「ああ。」

二人の気持ちは一つになり……

闘いが…

運命が…

決着する。

『Double Arts Legend』  
16：～進む～

「……何なんだ……これは……!？」

ウェルスの街、闘技場前まで来ていたファランは、思わず呟いたのだった。

地面が唸っているかのようだった。

ファランが感じ取ったソレは、並の領域を遙かに越えていた。

三つの大きなチカラ…

その内の二つは恐らくキリとエルレインのモノだろう。

しかしソレは余りにも……

今までの彼等の実力を考えれば大きすぎるモノだった。

「何が起きているというのだ……。」

真相を確かめるべく、ファランは闘技場へと歩を進めた。

所変わって、闘技場地下……

「終わらせましょう、キリさん。」

「ああ。」

お互いの手を強く握った。

決意を……固めるように。

「フン、奇遇だな…鼠と意見が合うとは。」

そう言ったコブラの姿は次の瞬間、土煙が上がると共にフッと消えた。

代わりにキリとエルレインの背後から、低い声が聞こえた。

「私も終わらせようかと思っていたところなのだよ!!!!」

コブラの腕がヒュン、と空を切った。

間一髪、地面と水平に放たれたリアットを前にお辞儀する姿勢で避ける二人。

大振りな攻撃の後で隙が出来たコブラの腹元を、鋭い後ろ蹴りで蹴り上げる。

ゴスツ……と鈍い音になる。

「痒いのだよ。」

ビクともしなかった。

先程倒した敵は、コブラよりも遥かに大きく、体格も良かった。

それでもコブラは平気な顔をしている。

ニヤリと毒蛇が笑うと同時に、どこからともなく《シュー……ッ》という音が聞こえてきた。

「……私の体には猛毒が塗ってある……がしかし、この毒を分解する抗毒薬を塗った上に……だ。」

シュー……ッという音の原因は、キリとエルレインの靴だった。

……コブラに触れた部分が溶けていたのだ。

「私が持っている毒の中で最も毒性の強いモノだ……！先程までのとは格が違うのだよ！！私は抗毒薬を塗ってある故平気だが、貴様らはどうだ！？私に触れることが出来るか！？」

コブラがキリとエルレインを蹴り飛ばす。

コブラに蹴られたキリの腹部とエルレインの肩の服が一瞬で溶けてしまふ。

確かに、この毒はかなり強力で……

現段階では敵の方が早く、力も強い。

でも、それでも…

共に生き抜くと誓った。

進む。

二人は前に進む。

その道の上に敵がいると言いつのなら…

その敵がどんなに強くても、やることは一つ…。

「倒す!!」

「倒します!!」

キリとエルレインが地面を蹴る。

急接近し、蹴る。

それでも毒蛇は動かない。

ならば、また蹴る、突く。

攻めて攻めて、攻める。

「……一撃毎に力が……上がっている……ッ！？」

次第にコブラの体が後ろに押され始める。

「じらあああ……ッ！？」

キリとエルレインが同時に正拳突きを繰り出す。

「グッ………!!」

コブラが後ろに吹っ飛ぶ。

すかさず距離を詰め、後ろ回し蹴りを叩きつける…

が、次はコブラが避けた。

「鼠ごときが喚くな!!!!!!」

グオオン、と重い蹴りが二人を吹っ飛ばす。

空中で体制を立て直し、着地と同時に再び地面を蹴った。

何度飛ばされても、二人は自分達の道の前に立ち塞がる敵に突き進んだ。

キリ達の体が溶けている様子もない。

やはり、ここでもフレアは毒を制す。

キリの蹴りでコブラがふらつく。  
すかさず、エルレインの踵落としがコブラを捉え、二人で宙に飛び上がった。

「何なのだアアッ！貴様らはアアッ…ッ…ッ！！！」

「一般市民Aと…」

「ただのシスターです!!」

振り上げた足を、降り下ろす。

決意の重さを乗せて……!!

『フィニッシュ……ッ!!……!!……!!……!!……!!』

ズガアアアアアン!!!!

コブラが地面に叩きつけられ……動かなくなった。

二人は……前に進む。

## 第16話：「進む」（後書き）

どうも！お久しぶりです！

遅くなってしまつてスイマセン！

え、とうとうコブラ編も完結しました。

初めてのオリジナルキャラだったので、緊張しましたあ（バトル描写も初めてだったし・・・）

なんと今回は、Legendの特別画像を紹介したいと思います！！

<http://art17.photouzou.jp/bin/p>

<http://art17.photouzou.jp/bin/p>

<http://art17.photouzou.jp/bin/p>

<http://art17.photouzou.jp/bin/p>

<http://art17.photouzou.jp/bin/p>

一枚目画像が、Legend1話目の表紙！

二枚目画像が、数話前に出てきたセミロングヘアのスイさんです！

両方とも、MARKK作画担当の『nazo』さんが描いてくれました、有り難うございます！（一枚目の文字ロゴ、塗りつぶしは私がやりました・・・。）

Legendもようやく2万HIT達成と言つ事で、ありがたやありがたや・・・

と言つわけで、これからも宜しくお願いです！

第17話：「若さと元気と重要ワード」（前書き）

急いで&眠さと闘いながら書いたので、文章がおかしい点があるかもしれません。

あつたら教えてくれると嬉しいです。

第17話：「若さと元気と重要ワード」

舞い上がる土埃の中、二人は立っていた。

決意が二人を強くした。

絆が二人を結んだ。

「…やりましたよ…！キリさん！！」

「ああ、エルーが信じてくれたからな。」

二人、目を合わせると恥ずかしそうに微笑み合う。

これは、一人の少年と、一人のシスターの物語…。

『Double Arts Legend』

17…若さと元気と重要ワード

グラグラグラ……

突然響く、何かの音。

「何だ？この音!？」

音が鳴り出すのと同時に、闘技場の天井や柱がパキパキ音をたてはじめた。

「ク……………ハハハ……………」

笑う、蛇。

「ゲッ、まだ意識ありやがるのか……………」

「ガゼルの暗殺者って皆タフですね（汗）」

「クハ……………ハア……………、この建物の……………基盤を爆破した……………共に逝こうかア……………鼠諸君……………！！！」

走る、衝撃。

二人は、驚きを隠せなかった。

「爆破…！？展開がベタすぎるだろ…！！！」

「と、とりあえず逃げましょう、キリさん！」

走り出そうとした、その時…

「……………ッ!？」

「……………あッ?!」

二人は同時に、地面に膝を付いてしまった。

足に、力が入らなかった。

「ちよっ……………何なんだよ…!？」

「足に……………力が入らない…？」

二人は、立ち上がる事も出来なかった。

「……………クはハア…一般人が…あんな力を出したのだ……………。もう体が限界なのだよ…ツ君達は……………!!！」

「ちよっ……………ヤバくねえか……………ツ!!!？」

バリバリと音をたてながら、天井にヒビが走る。

「動け……よオ、身体ア……ッ……！」

「キ……キリさん……上えッ……！」

見上げれば、次々と落下してくる天井。

《ズゴオオオアア……！！！！！！》

二人の背後に、巨大な石材が落下した。

動かない、足、身体。

心臓ばかりがバクバクと脈打つ。

「キヤアアアツツ！……！！！」

「くツ……ツ！……！！！」

「終幕……なのだよ……。」

《ズドドドオオオアアア……ツ！……！！！！》

ウエルスの街、闘技場が崩壊したこの日……。

空は、漆黒。

時計塔の屋根では、カラスが紅い眼光を光らせていた。

\*\*\*\*\*

「おーう、調子はどうだ？アイツの。」

治療室から出てきた看護婦に声をかけるスイ。

そのどことなく落ち着きの無い佇まい、露出の多い派手な服、雑な言葉遣いは、どこまでも病院の雰囲気から浮いていた。

「はい、腹部からかなりの量の出血をしていましたが、幸い傷はそこまで深く無かったようです…」

「おッ、助かった？良かったじゃん！」

まだ看護婦の話の途中なのを無視して、スイが気楽そうに言った。

「死者の第一発見者なんてなりたく無いからなあ。」

「今は血が少ないので意識を失っていますが、体力が回復すれば目を覚ますでしょう。」

という具合に、スイがつまらなさそうに看護婦の説明を聞いていた時だった。

治療室が、いきなり騒がしくなったのだ。

《ガタツガタツ…》

《ち、ちよっと！？患者さん！！》

幾人かの看護婦の声、医療器具がガチャガチャと音をたてる。

「どうした…？」

「わ、わかりません…ちよっと様子を見てきますね。」

そう言っつて治療室の中に戻っていく看護婦。

《え！？もう意識が戻ったんですか！！？》

すかさず看護婦の驚いた声が聞こえてくる。

「ナニナニ　？なんかトラブル？」

興味津々のスイも躊躇う事なく治療室の扉をくぐる。

「ちよっ、どこだここは！！？私は確かに…ッ」

「お、落ち着いて下さい患者さん!!ここは病院です!!」

どうやら、スイが見つけた女が目を覚ましたらしい。

ひどく、動揺した様子だった。

「病院……？私は……。」

「あなた、この街のすぐ南にある森で倒れてたのよ？その長髪のお嬢さんが見つけたの。」

ニコツと笑った看護婦がスイの方を見ながら言った。

スイもとりあえず、看護婦の様に”ニィ〜”と笑って見せる。

「助けられた……そうか、私は……」

女は、下を向いて少し黙り込んだかと思うと、すぐに顔を上げた。

「有難う御座いました。それと、先程は騒ぎ立ててしまつて申し訳ない。」ミリティアシスターたるもの、常に平常心を持ち、人々への礼儀を忘れるな」とキツク言われていたのだが……これで隊訓を二つも破つてしまつたな……」

「やっぱしアンタ、シスターだった？ そうだと思つたんだよねえ。ソレっばいニオイがしたから。」

一瞬、「ニオイ」と言う言葉を聞いて、ポカンとした女だったが、すぐに何かを思い出したような様子で焦つて喋り出した。

「そつだ！私のせいで誰かがトロイにかかったなんて事は……！！  
」？」

「あゝ、それなら平気平気。アタシが天才だったお陰で二次災害はゼロ。」

つい先日キリに教えてもらった、”バカとガキには使えない、難しくて賢い単語”の一つ、二次災害を得意気に使ってスイは言った。

「最初スイさんは一人で病院に突っ込んできたんです、大慌てで。  
”シスターが倒れてるから手袋その他付けて運ぶの手伝え！！”ってね。」

スイの口調を真似しながら看護婦が話す。

「そうか……なにからなにまで世話になった……。貴女が助けてくれたんだな、えくと……スイさん。」

女がペコリと頭を下げた。

スイ様に感謝しながら、なんて笑いながらスイが言う。

「それでは、私にはとても大事な用事があるので……これで失礼させていただきます。」「

女は棚に乗っていた自分の私物を手に取ると、ポーチの中から銀貨を数枚出して看護婦に握らせた。

「ちょっと患者さん、アナタがこんなに早く意識を戻して元気なのは驚いているけど……まだ安静にした方が良い事に変わりはないわ。」「

「その事なら心配いりません、私、回復力には自信があるもので。それに、私の用事と言うのは国家機密級の任務。こんなところで寝ているわけにはいきません。」

そう言うと女は早足で治療室を出ていった。

引き留めようとする看護婦に対して、院長らしき年配の男が出てきて言った。

「ああいう娘は動いてた方が良く回復するんだよ。若い娘はあれくらい元気な方が良い。」

その言葉もあつてか、看護婦達は女を追いかけるのをやめた。

その代わりにスイが走って女を追い始めた。

「あ、ちょっとスイさん、もう行くんですか!？」

「ああ、ちよつとアタシアイツに聞きたい事があるから！助けるの手伝ってくれてサンキューな！！」

スイが治療室のドアを、バンツと閉めた。

治療室には残された看護婦数名と院長。

皆、嵐のようにやって来て嵐のように去っていった二人に、終始ボカンとしていた。

「うんうん、元気でなにより。」

静かな部屋に、院長の声が静かに響いた。

\*\*\*\*\*

「おい、ちょっと待て！！！」

病院を出たところで女に追いついたスイ。

「アンタ、ミリティアシスターとか言ったよな？」

「…ハイ、そうですが、何か？」

「いや、そのミリティアシスターっていう言葉、確か結構な重要ワードだった気がするんだよねえ……。」

「……………」

「いや私さ、どうでもいい事ってすぐ忘れるわけよ。でも、かなり

重要な事は”どっかで聞いたような…”程度に憶えてるわけ。んで、そのミリティアシスターってワード、どっかで聞いたことある気がするのよ。」

「かなり、重要な事でもその程度にしか憶えて無いって…。私よりも適當…。」

と、女が軽く引き気味に言う。

「アンタ、名前なんてーの？」

「…アンディ。アンディ＝フラウだ。」

「ああ…!…」

スイが手を叩く。

「何か、分かったんですか？」

アンディが訊く。

「それも聞いたことある…!!」

「聞いたことあるだけですか…」。

アンディが呆れる。

「でも、私は貴女を知りませんし…何かの間違いでは？」

「いや、アタシの鋭すぎる勘が」アンタは重要人物！！」って言うてる！…アンタ、これからの目的は？」

「うーん…人探しです。詳しいことは国家機密なので言えませんが…デオドラドにいる男二人女二人の四人組を探しているんです。」

「デオドラド」アインド」男二人女二人の四人組」ヒット！！！」

スイが、なんだっけ、と眉間にシワを寄せて考える。

…。  
…。  
…。

《ポンッ!》

スイの頭に花が咲くと同時に、スイが手を叩いた。

「分かった!!それちょっと前のあたし達じゃん!!!!」

「いや、多分人違いだと……………」

「そんな事無えって!お前、アレだろ?エルーの親友!!」

……。  
……。  
……。





**第17話：「若さと元気と重要ワード」（後書き）**

私は喪中なので、おめでとつとは言えませんが、去年一年お世話になりました。

私からのささやかなお年玉、17話、いかがだったでしょう？

バトルも無いし、話もダラダラしてたし、長いし微妙だったかも知れませんが、スイマセンです（汗）

個人的には、緊張したシーンが続いたので、ギャグを交えながら気楽にやるうかと思っただのですが、あまりギャグに自信が無いのです（汗）

では、次話でまた会いましょう。

今年も一年、宜しく願います！

第18話：「筋肉痛は生きてる証」（前書き）

うん、なんか最近荒れてるな、自分。

なんか小説の書き方忘れたっていうか、変な方向に走りすぎって  
うか。

スランプです、はい。

頑張ります。

第18話：「筋肉痛は生きてる証」

「……………んッ……………」

痛い。

どこが？

…体中が。

あれ、今私何やってるんだっけ？

キリさんと協力して、敵をやっつけて、それで……………。

そう、それで建物が崩れて…私達は、瓦礫の下敷きに……………。

……………って事は…アレ？

…死んだの？私達……………？

『Double Arts Legend』

18：…筋肉痛は生きてる証…

目を開けた時、眼前に天国が広がっていたら…？

いや、もしかしたら地獄かも知れない…？

いや、きっと大丈夫…だよな。

うん、きっと天国。

そんな想像を膨らませながら、エルレインは恐る恐る目を開けた。

「……………ここ…は？」

眼前に広がるは、蒼い空。

どうやら、地獄では無いらしい。

というか、死んで…ない。

コブラにさらわれたのは確か夜だった筈。

と言うことは、今は次の日の昼と言うことになるのだろうか？

仰向けに寝ていた体を起こし、辺りを見回す。

辺りには崩れた建物の瓦礫、隣にはキリが寝ていて……。

後ろにはファランが立っていた。

「目が覚めたか？」

「えっと…これはどういう状況…ですか？」

エルレインがファランに問う。

しかしファランはその質問に答えはせず、突然しゃがんだかと思うと、優しくエルレインの肩に手を置いた。

「痛…ッ…!!？」

瞬間、体に電流のような痛みが走る。

戦いのダメージが残っているのだろう。

エルレインの反応を見て、ファランが口を開いた。

「ここは、ウエルスの街の外れにある闘技場だ。状況は…生きて  
いる、と言えば良いのか？」

エルレインが返事をしようと口を開きかけた。  
が、ファランがそれを手で制した。

「とりあえず治療が先だ、病院に行くぞ。話はその後だ。」

ファランが言った。

キリはまだ目を覚まさない。

どうして生きているのかも分からない。

ガゼルがどうなったのかも分からない。

でも二つだけ、確かなこと。

それは、二人が生きてること。

そして、そのことが一番大切であり、エルレインを安心させた事。

それだけ分かれば、きっと大丈夫だ。

そう思いながら、エルレインは蒼い昼空を見上げた。

\*\*\*\*\*

「なんなのかしら、今日は。」

一仕事終えた看護婦が、ハアツ、と溜め息をつく。

先程急患を送り出したばかりなのに新たな急患が二人も入ってきた。

しかもシスターと一般人が当たり前のように手を繋いでいるのだ。  
慌ただしい一日だ。  
そう思わずにはいらなかった。

… 病室。

「えっ、ファランさんが助けてくれたんですか!？」

「…俺がお前らを助ける事がそんなに不思議か？」

ファランは事の経緯をエルレインに話した。

二人を追って闘技場まで来たこと、二人がコブラを倒す瞬間を目撃したことで、闘技場が崩れそうになったとき、二人を外まで運び出したこと……。

エルレインにとって、ファランが自分達を助けてくれた、という事実は意外だった。

「だってファランさん、誰かを護るために力は使わないって……。」

「…勘違いするな、俺はただ、闘技場からお前達を運び出したただけだ。誰かと戦ったわけではない。」

ファランが左右の足を組み直しながら言った。

「状況は、大体今話した通りだ。そしてお前らは…紛れもないお前らの力だけで強大な敵に打ち勝った。誇って良い事だ。」

そう言いながら、ファランは考える…。

この二人は、自分の力で…ファランの助けなしで、敵に打ち勝った。

死ぬか生きるかの攻防、紙一重の戦い。

ファランはそれを見守っていた。

二人がどんなピンチに陥ろうと、ファランは二人を助けることが出来ない。

どんなにファランが二人を助けたいと望んだとしても、だ。

ファランは自分の心が分からなかった。

自分が二人を助けたいと思っているのか…

二人を仲間だと思っているのか…

今回は、キリとエルレインが自分で敵を倒せたから良かったが、この先、もし二人がピンチに陥ったとき…

死の危険に面したとき、自分はどうするのか。

今まで通りただ見ていただけなのか、それとも、例え敵と戦う事になっても二人を護るのか。

ファランの中で、スイの言葉が反芻される。

… 護りたい奴が、仲間。

自分は、二人を護りたいのか。  
幾ら考えても、答えは出てくれそうに無かった。

「ファランさん？」

「……………ん？」

思考を中断したファランの耳に、エルレインの声が響いた。

「あ、やっと気付いてくれた…。どうしたんです、さっきから考え事してるみたいですけど？」

「……………何でもない、気にするな。」

ハアッ、と溜め息をつくファラン。

「…少し外の空気を吸ってくる。」

「え、ちょっと、ファランさん？」

エルレインの声には反応せず、部屋から出ていくファラン。  
診療室のドアが、バタンと閉じた。

暫くして、ベッドで眠っていたキリが突然声を上げる。

「…ッ痛っ！！？」

「…って、え！？どうしたんです、キリさん！？」

慌ててキリの方を見ると、目覚めたばかりの彼がベッドの上で悶えていた。

「イテテテテテ…なんだこれ…筋肉痛…！？」

「き、筋肉痛…ですか？」

「ああ……どつやら極度の…。」

実はエルレインも筋肉痛状態だったのだが、見たところキリの筋肉痛はエルレインのそれを遥かに上回る症状だった。

涙目状態のキりに、エルレインはとりあえず現状を説明する事にした。

「……と、言うわけです。」

「ん〜、なるほど…：ファランが、ねえ。」

「…っていうか、なんですかキリさんwwwその体勢www」

エルレインが笑いを押しこらえて言う。

と、いうのもキリがベッドの上でとてつもなく変な体勢を取っているからなのだ。

例えるなら、そう”デビュー戦で敗北した曙”みたいな…。

「うるさい、笑うんじゃない！この体勢が一番楽なんだよ！！」

「そんなに辛いんですか？」

「…ガチで辛い。」

「ん〜、じゃあマッサージしてあげましょうか？」

キリがピクン、と反応する。

「いいのですか…フィガレット様…!？」

「えっ、いきなりなんですか…?」

男にとって、女の子に体をマッサージして貰うというのは、それはそれはアレでして…。

しかもそれが自分の想い人とあれば、これはもうウホツな事態なのであります。

「いいですよ、それぐらい。いつもキリさんには迷惑かけてばかりですしね。」

「んじゃ、お言葉に甘えてお願いしようかな。」

少年キリ＝ルチルはこの時、まだ知らなかった。

後にこの選択が地獄のマッサージタイムを産み出すことになる事を…。

\*\*\*\*\*

「本当に匂いなんかで彼等の居場所が分かるんですか？」

「アタシを舐めんなって、大丈夫、確実に近づいてるから。」

呆れたように言うアンディと自信満々に答えるスイ。

二人は現在、キリ・エルレイン・ファランの三人と合流するために彼等を探し歩いていた。

「……って、スイさん……？ちょっと……。」

「ん？どした、奴等はもうかなり近いぞ。」

「いや、というか……。」

アンディが指を差す方向に、スイも目を向ける。

「先程の病院なんですが……。」

「あれ？戻ってきた……？」

何やってるんですか！とアンディが不満の視線をスイに向ける。しかしスイは気にすることなく病院に向かって歩き出す。

「ちょっとスイさん？そこに居るわけが…」

「いいや、絶対ここだ、間違いないね！！！」

自信満々に言いながら、スイが病院の入り口を開けようとしたとき、同時に中から見覚えのある男が出てきた。

「……………」

「……………」

目が合う二人。

その男、全身黒服。

その男、前髪バツテン。

…というか、その男、ファラン＝デンゼルだった。

「…おお、バツテン！！！！！」

「……………スイ！！？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9852g/>

---

DoubleArts Legend

2010年10月9日21時18分発行